

キリスト教保育

年主題
共に喜んで
～すべての歩みの中～

巻頭言

子どもたちを通して、
その先にあるものに
目を向けて
公文和子

小論

虫が教えてくれること
山崎裕



2021 AUG **8**

信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。

口語訳聖書・ヘブル人への手紙12章2

1986年度のキリスト教保育誌の年主題は「きり拓く」でした。若々しい、前向きなテーマです。「きり拓く」には〈力〉が必要です。どんな〈力〉が必要でしょうか。人の知恵や力も必要でしょう。それを否定はしません。しかし、本当に必要なのは、イエスの力だと思います。「イエスを仰ぎ見つつ走ろうではないか」と言われている通りです。

聖書の原文によれば、「導き手」は始めさせる方、「完成者」は目的に到達させる方、という意味です。ですから、イエスはスタートからゴールまで、一緒に走ってくださる方、ということになります。それだからこそ、イエスは私たちにとって〈力〉なのです。では、「イエス」という方は、どんな方でしょう。

イエスのたとえ話にこのような話があります。「ある人に二人の息子がいた。弟息子が財産を分けてもらって旅に出た。けれども彼は、それを使い果たしてみじめな生活をしていた。その時、彼は、父のもとに帰って雇人として働かせてもらおう、と考えた。財産を食いつぶした自分が、息子として受け入れてもらえるとは思えなかったのである。けれども、意外なことに、父は息子をゆるし、大喜びで迎えてくれた」、といった話です。

ここには、イエスの精神が豊かに波打っています。この話の背後には、キリストの十字架のゆるしがあります。イエスは、彼のもとにやってくる人々を、それがどんな人であっても、あるがままの姿で「受け入れ」られたのです。

私たちが、あるがままに「受け入れ」られていること、人をあるがままに「受け入れ」ること、これは、本当に豊かなものを生み出してくれます。「受容」という言葉は、心理学の重要概念ですが、考えてみると「十字架」「ゆるし」にその源があるように思うのです。

幼児教育に関わるようになって、子どもを「あるがままに」、「受け容れる」ことの大切さをしみじみ思います。大げさに言えば、それは、乳幼児教育、いや教育の根本原理ではないか、とさえ思います。それは、イエス・キリストの「ゆるし」を抜きにして、本当に理解できるだろうか、とも考えるのです。

岡本不二夫・執筆 当時・日本キリスト教団平塚教会牧師 附属平塚二葉幼稚園園長
1986年「キリスト教保育」誌4月号より



キリスト教保育

第629号8月号

年主題

共に喜んで

～すべての歩みの中～

幼子とともにキリストへ

目次

〈巻頭言〉

子どもたちを通して、
その先にあるものに
目を向けて 公文和子

〈論説〉

『キリスト教保育指針』

改訂にあたって(1) 松浦浩樹

〈小論〉

虫が教えてくれること(1) 山崎裕

聖書にきく・お話 後宮 敬爾

【カリキュラム】

8月 月のねがい表

心にとめて 海野美代子

0・1・2歳児 円町まぶね隣保園

実践からの学び 鈴木直江

心にとめて 児玉純子

3・4・5歳児 茂呂塾保育園

実践からの学び 井出孝太郎

2

3

4

6

14

18

香きいて 横山基生

〈連載〉保育者する人々への

12のエール 石丸 昌彦

〈連載〉ええやん、

わらべうた! 田中元気

図書紹介 平沼晶子 森田喜基

礼拝のお話 友野富美子

目福 口福 耳福 中野富美子

風 長山篤子/編集子 白井真名子

連盟だより

43

44

46

51

61

62

63

21

22

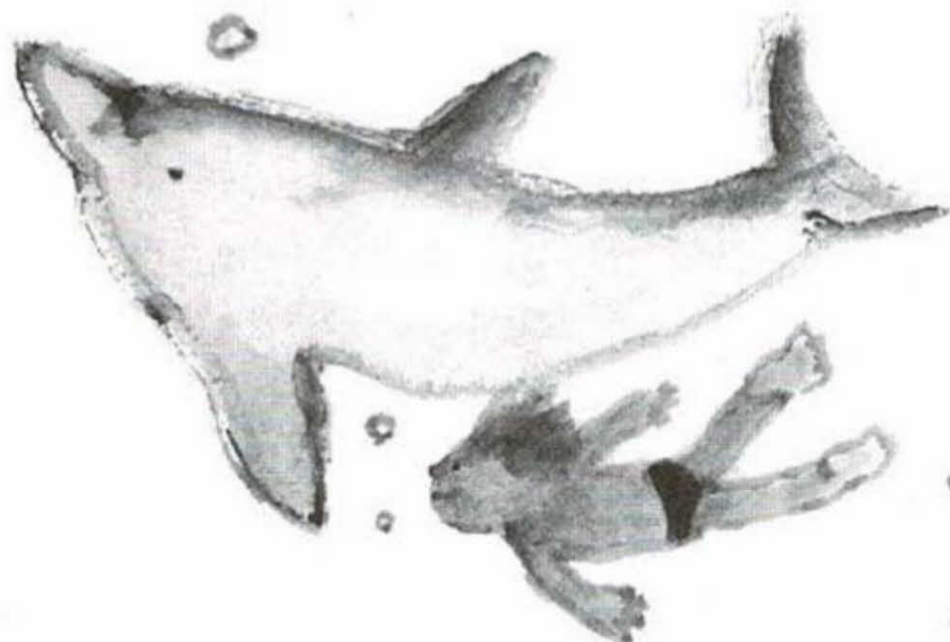
24

30

31

34

42



表紙絵
カット

田中横子
長野祥三
中畝治子
金井ユリ

長縄えいこ
松成真理子